



共に「まちの未来」を創っていく 対話プロセス 【コンセプト1：対話型の設計プロセス】

開園後の連携や運営につなぐ 対話プロセス

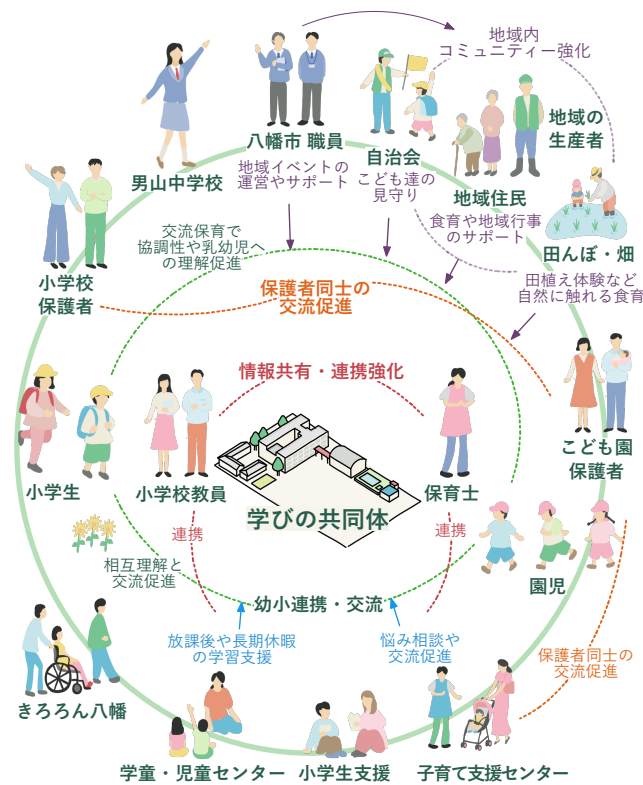
今計画は、2つの保育園の統合、幼小連携により、地域の子育て・教育の中心的な場所になると考えられます。対話プロセスでは、最初は既存会議の場などを通じて教職員や保護者、地域住民ごとに話し合い、徐々にワークショップ(以下WS)形式で参加メンバーを増やして関わりの「輪」を広げていきます。実際の幼小の体験学習や環境学習などを行いながら、開園後のスムーズな運営や連携につながるプログラムを実施します。

コストコントロールが可能な ワークショップ方法

WSは、とすれば「あれが欲しい」といった具体的な施設内容や物の要求になる傾向があります。私たちのWSでは「誰と」「どのような場で」「何をしたい」といった活動のイメージを参加者から描き出し、設計チームで具体的計画に落とし込みます。コスト増になりやすい傾向のある物の要求を避け、コトのイメージを共有することでコストコントロールを図り、多様な活動が展開される場をつくります。

「学びの共同体」をつくる

多様な人たちと対話を重ねていくことで、こどもを地域の皆で育て、関わり合いを深めていくネットワークをつくります。開園後も様々な人が参加・交流できる場や仕組みを整え、共に関わりながら成長できる「学びの共同体」を目指します。

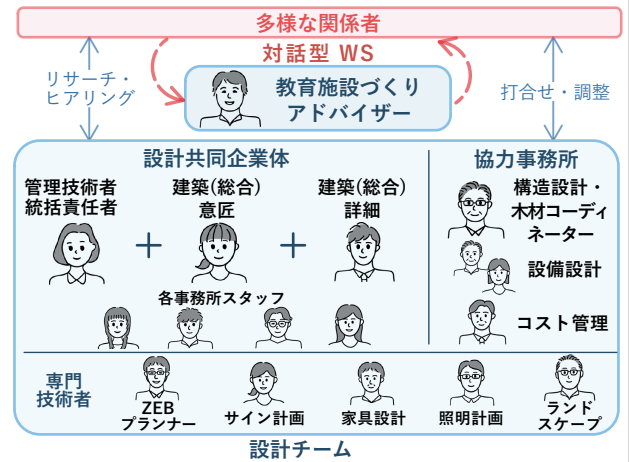


多様なメンバーで集合知を発揮する 設計チーム

●対話をサポートする 教育施設づくりアドバイザー
学校の教育プログラムや子育て支援の実績がある「教育施設づくりアドバイザー」が中心となって対話プログラムを実施。学校設計者としての実績もあり、対話内容を建築計画に導く役も担う。

●複眼的視点を活かす 意匠3者の設計共同企業体
共同体を構成する3者は、2者が女性や子育て経験があるほか、同類の中規模施設のほか、きめ細やかな住宅設計の実績を有す。3者の複眼的視点でチェックや改善を行い、設計の質を高める。

●技術力を集結したオール設計チーム
准木材コーディネーターを有する構造設計者をはじめ、ZEBの知識が深い専門家を加え、技術力に厚みのある設計チーム。



こどもの学びを深める 対話プログラム

0～5歳は感性が豊かで、心と体の健やかな成長を育む土台となる時期です。今計画では、園児や小学生たちが日々の生活で伸びやかに成長し、共に学び合う環境を目指しています。園をつくるプロセスにおいても、こどもたちが参加し、学びへとつながるプログラムを実施します。また、こどもの豊かな創造力を引き出し、園の記憶や記録として残し、次世代へ繋ぎます。

●既存保育園の「宝物」さがし

簡易カメラやシールを用いて、既存園の好きな場、遊びをピックアップ。「宝物」さがしのワクワク感で。



●園舎に参加の記録を残す

壁塗り、木の外壁張り、サインなどのアートワークを通じて創造力を引き出す。参加の記録を園舎に。



●園づくりのプロセスを絵本に

既存園の記憶や園づくりプロセス、新しい園の誕生を絵本や映像にまとめ、みんなで共有し、次世代へ。



参加意欲や意見を引き出す 対話ツール

●対話では一目瞭然なBIMによるCGや大きな模型等を用い、誰もが参加できる情報ツールを提示。



●こどもには簡易カメラやお絵かき帳、大人にはポストイットなど、意見を引出す対話ツールを使用。

設計工程と連動した 対話スケジュール

※全体スケジュールは5頁を参照

年	2025					2026					2027					2028														
月	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	...	7	8	9	10	11	12	1	...	8	9	10	11	12	...
進め方	調査・調整		関係者 WS					共につくる 参加型WS					共につかう 体験型WS					継続的WS												
	▼園長会議利用		▼教職員会議利用					▼太鼓祭り ▼夏休みWS ▼絆フェスタ					▼夏休み木育WS ▼絆フェスタ					▼竣工式 ▼開園												
	① ②		③ ④ ⑤ ⑥					⑦ ⑧ ⑨ ⑨					⑩ ⑩ ⑪					⑫ ⑬												
	主な対象者 園長 市担当者 園児		保育士など 保護者 小学校教員 保育士 地域住民 (自治会員や見守り隊など)					保育士など 小学生 小学生教員 地域住民 周辺施設利用者					園児・小学生 保護者 園児・小学生 保護者 みんな					みんな												
設計への反映	① 園長や小学校の校長などへ個別のヒアリングとスケジュール調整・相談		③ 既存園の良い点、改善点、提案点などで色分け分類しながら意見をヒアリング。活動イメージを描き出し					⑧ 大きな模型やCGパースを用いて運営・利用シーンを具体的にイメージ					⑩ 夏休みやイベント時を利用し、こども中心の体験型WSを実施。木育や幼小体験学習を通して学ぶ					⑫ 開園後の運営や交流のスタートとして竣工式を開催												
	② 既存園の宝物(好きな所)を写真に撮ったり、シール貼り		④ 園に求める点、提案点、質問や、保護者としての関わり方についてアンケートやヒアリング					⑨ みんなでどんな活動をしたいか考え体験交流や学習を実施					⑪ アートワークや木の外壁貼りなど、地域全体でWS。単なるものづくり体験だけでなく、完成が楽しみになる期待感をつくり、園舎デザインの向上も図る					既存園の記憶、新園舎づくりを記録化して次世代へ継承												
			⑤ 幼小連携の在り方や一緒に活動イメージを共有					WS参加者や地域住民に開かれた場でお披露目会																						
			⑥ 地域のこども達のために、地域活動の場としてどのような支援ができるか意見を出し合い																											
設計への反映	基本設計①		基本設計②					実施設計①		実施設計②			見直し調整			現場監理・施工段階					総括・振り返り									
	●WS参加者の日程調整 ●詳細スケジュール作成		●全体配置計画 ●ゾーニング ●外観・動線 ●セキュリティ計画 ●部屋の間取りや大きさ					●細かな間取り ●素材、家具の仕様など								●運営の仕方・可能性について共に検討 ●実際のものづくりを体験し、参加意識を醸成					●パンフレットや絵本で媒体化									

ヒト・コトを結ぶ「みんなの大屋根」と 大小の空間スケールで 多様な居場所がある園舎【コンセプト2：遊びと保育が調和する保育環境】

地域・こども園・小学校をつなぐ「みんなの大屋根」



大屋根下の幼小連携ゾーン・わいわいテラス

地域＝エントランスと子育て支援、こども園＝皆が集う遊戯ホール、小学校＝幼小連携ゾーンを園舎の中心に設け、大屋根で包み込むように一体的に結びます。大屋根は地域～こども園～幼小連携を緩やかにつなぎ、その下では出会いや集いなど様々な交流が生まれます。ヒト・コトを結ぶ「みんなの大屋根」は、「まちの未来」を描く存在となります。

木立を通り 木漏れ日を感じる「森のトンネル」



来園者を迎える 森のトンネル

大屋根は、樹の形状に見立てた柱による、木立のような「森のトンネル」で支えています。樹形のような木トラスからは木漏れ日が落ち、木の構造体そのものが、こどもの記憶に残る風景をつくります。

大小様々なスケールの空間／「家」のような保育室

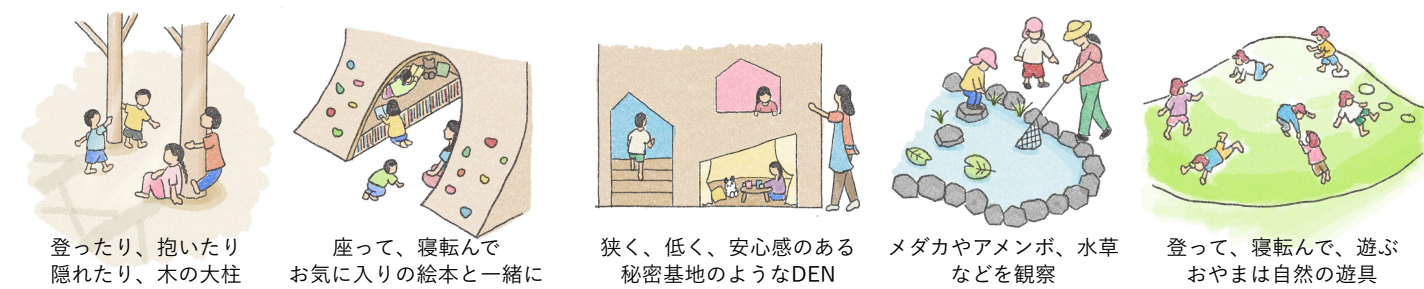


すぐに外に出られる 園庭に面した保育室

- 大屋根のまわりには、中小のさまざまなサイズの室が集う構成。分棟型によりフレキシブルなプランニングと、屋外空間を含め多様なスケールの空間が可能で、多様な居場所をつくる。
- 分棟による「家」のようなスケール感の保育室は、安心できる日常の生活の場。室内の天井の高低差やリトルスペースのDENにより、こどもそれぞれの気持ちや個性に寄り添った場をつくる。



自発的な遊びと学びを広げる 居場所



登ったり、抱いたり隠れたり、木の太柱
座って、寝転んでお気に入りの絵本と一緒に
狭く、低く、安心感のある秘密基地のようなDEN
メダカやアメンボ、水草などを観察
登って、寝転んで、遊ぶおもちゃは自然の遊具



森のトンネルにつづく 遊戯ホール

遊戯ホールは みんなが集う 園の中心に

- 遊戯ホールは、伸び伸びと体を動かし行動範囲も広い3～5歳児の保育室からすぐの園の中心に配置。
- わいわいテラスや、エントランスと連続的に繋がり、小学生と園児の屋内外での一緒に遊びや、入園式等の保護者が集うイベント時には一体的な利用が可能。
- 職員室からの見守り、ランチルームとの繋がり。
- 高窓からの光が、森のような架構をとおして木漏れ日のように落ちる、大らかで伸びやかな空間。

いつでも いろいろ遊び・学ぶ 多彩な外部空間

- 各保育室からすぐに生まれ、みんなが同じ場に集う広めの園庭と、体格差に配慮した乳幼児の2つの小さな庭。設計事例：園庭を中心に一体感のあるつくり
- 室と室の間の小テラスは、数人で集まる溜まりの場。大きな屋根下の「わいわいテラス」も含め、夏場や雨天時でも利用できる外部空間。
- 園庭や菜園では、土や水に触れ、野菜や草花、樹木を育て、五感が刺激され豊かな情感を育む。
- プールや砂場には、暑さ対策の日除けシェードを設ける仕組み。気候が良い時には取り外し可能に。



保育士が見守りやすく 働きやすい環境

- 職員室は、登園、保育室、園庭、遊戯ホール、エントランスが見渡せる要の位置に。こどもたちは「見守られている」安心感に。
- 職員休憩室、会議室などは2階に配置し、園児と離れてしっかりと休める環境。

活発な幼小連携と 安心安全な保育環境の両立 【コンセプト3：幼小連携及び小学生の活動のための空間づくり】

安心安全な保育環境をつくる こども園の南側配置

- 今計画は、こども園と小学校が同じ敷地にあることが特徴であり、**幼小のこどもたちの活発な交流と安心安全な保育環境を両立**させる配置・動線を計画。
- 園児と小学生の生活時間、体格などの違いに配慮し、園舎は小学校と距離感を調整できる敷地の**南側に配置**。
- 囲われた南向き園庭や、乳幼児の午睡環境など、**穏やかな保育環境を実現**。

校庭に開かれた 幼小連携ゾーン=広場 + わいわいテラス

- 校庭側に面して、**広い間口の広場と屋根付きの「わいわいテラス」**を設置。校庭とスムーズにつないで、小学生が来やすく自然と集う。**異年齢ならではの交流と多くの学びが生まれる場**。
- 小学校とこども園が、校庭を介して対面し相互に見合える配置。日頃から互いの存在を意識することで、出会いや交流が生まれるきっかけに。
- 学童施設にも隣接し**、学童のみんなも加わって活動。



利用目的に応じた 2つのアプローチ動線と 安全性への配慮

【利用目的に応じた 園への2つのアプローチ】

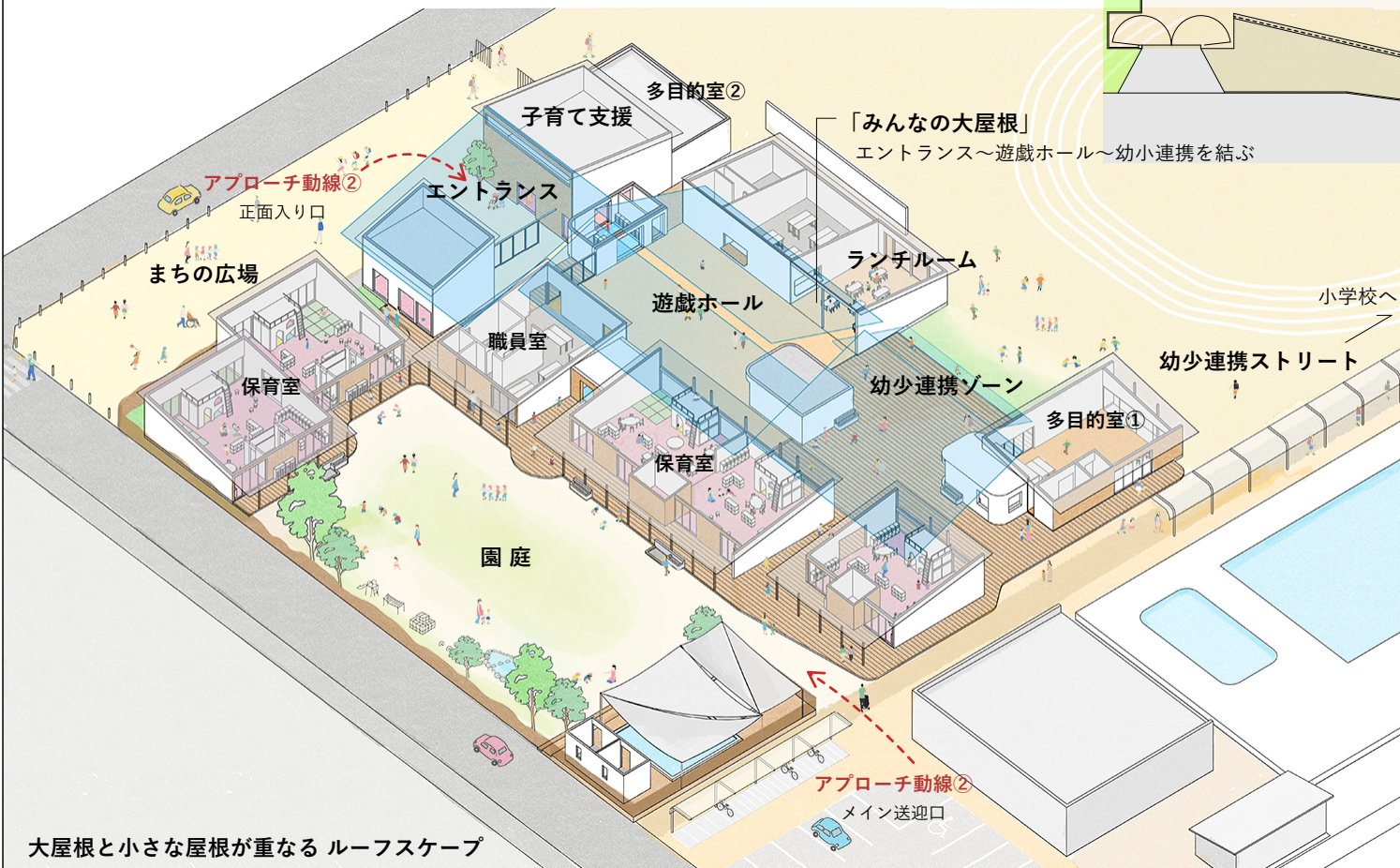
- 周辺に住宅街が広がる敷地の南西角**を「まちの広場」として開き、園の顔となる正面玄関を設ける。徒歩での送迎や来園者、イベント時の保護者や地域住民の利用を想定。子育て支援センターの入口も併設。→**アプローチ動線①**
- 多くの利用がある車や自転車での日常の送迎は、敷地南西の駐車場側から入り、園庭を通して**保育室まで直接こどもを預ける**。→**アプローチ動線②**
- 2つの動線は、いずれも職員室からはよく見え、**来園者の見守りや管理は容易に**。

【互いが干渉しないアプローチ動線】

- 時間帯が重なるこども園の送迎動線と小学校の通学動線は、**入口を変えて干渉しない計画**。
- 子育て支援や来客の動線は、保育中のこどもからは見え、気が散らない。

【歩車分離による安全性の確保】

- 小学生の通学を含む徒歩動線と車・自転車動線はしっかりと分ける。また送迎駐車場には歩行者専用通路を向けて、**歩車分離を徹底し安全を確保**。



大屋根と小さな屋根が重なる ルーフスケープ

みんなの菜園

幼小連携の活動イメージ



体育館

幼小連携ストリート

屋根付きで 園と小学校を結ぶ

園と小学校を行き来する 幼小連携ストリート

- 校庭の北側に、こども園と小学校を結ぶ屋根付きのストリート計画。明快な動線により率先して行きやすく、こどもや教職員の活発な交流につながる。
- 屋根を設けて「**結ぶ動線**」を視覚化することで、積極的な幼小連携・交流のあり方を示す。
- ストリートの途中には、菜園や体育館の寄り道スポットも。こどもたちの発見や楽しみにつながり、自然な交流の場に。
- 長さ120mの屋根付きストリートは、校庭での日常の体育授業や体育祭や地域イベント等でも、**雨天時や日除けに有効的に利用**。

小学生登校動線

登園と交わらないよう配慮

学童

駐車場は 歩車分離を徹底

送迎車両

登園動線

駐輪場

メイン送迎口

多目的室① 幼小連携

わいわいテラス

校庭に開かれた
テラスと広場

アプローチ動線② 保育室に直接アクセス

園庭

見守り

3～5歳児

遊戯ホール

森のトンネル

職員室

正面玄関

多目的室② 子育て支援 小学生支援

0～2歳児

まちの広場

アプローチ動線①

南西角をまちに開く広場として整備

配置プラン 1:600

2つの性質の異なる多目的室は 動と静の 適した配置に

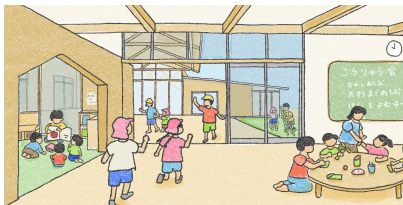
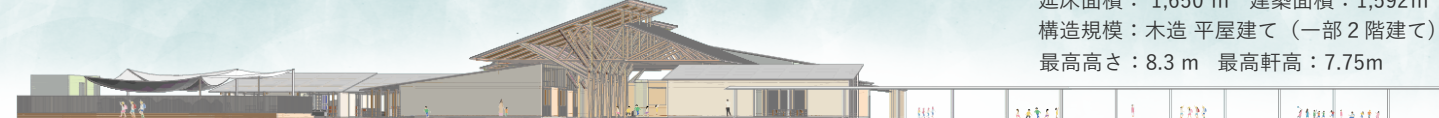
【多目的室①=幼小連携は 広場とわいわいテラスに隣接した 活動的なスペースに】

- 異年齢で屋内で遊んだり、映像を見たり、勉強を教え合ったりする多目的室①は、広場とわいテラスに面した**活動的なゾーンに配置**。屋外の広場、半屋外のテラス、屋内の多目的室と一体的に計画し、個々のこどもの遊びや学びに応じた利用が可能。
- 児童書や絵本を集めた**図書コーナー**を併設。多目的室①とは仕切られた落ち着いた場。
- 教職員の合同会議などの利用を踏まえ、可動式パーテーションなどで、室を区切れるように計画。また会議使用時の家具などを納める収納スペースを用意。

【多目的室②=小学生支援は 賑やかな活動とは距離を置き 落ち着いたスペースに】

- 多目的室②は、こども園の日常な生活や、活動的な幼小連携スペースとは距離を置いて、園舎の北西側の角に**子育て支援センターに併設して配置**。
- 入口は子育て支援センターと校庭側からの2箇所を設け、その時々気持ちや時間帯に応じて、適宜アプローチできるよう計画。
- 子育て支援センターと隣接することで、常に大人が近くにいる見守りが可能。

東 立面パース



多目的室① 屋内外が繋がりが 色々な遊びに



多目的室② 子育て支援と緩やかにつながる

■建築概要

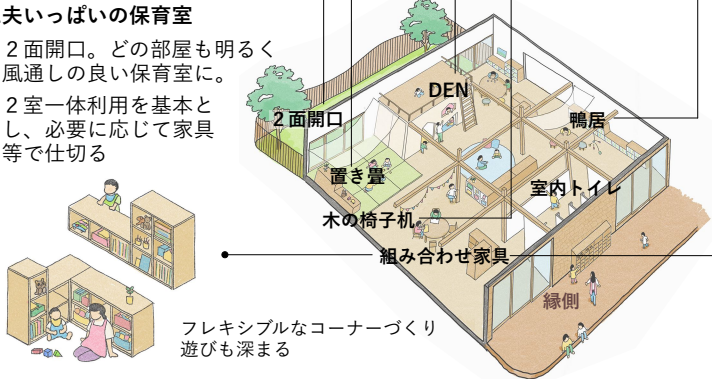
敷地面積：20,916㎡ 建築面積：1,592㎡
延床面積：1,650㎡ 建築面積：1,592㎡
構造規模：木造 平屋建て（一部2階建て）
最高高さ：8.3m 最高軒高：7.75m

しなやかで開かれた 柔軟性のある 保育空間 【コンセプト4：可変性のある空間設計】



工夫いっぱいの保育室

- 2面開口。どの部屋も明るく風通しの良い保育室に。
- 2室一体利用を基本とし、必要に応じて家具等で仕切る



保育の多様性や創造性を生む 柔軟な環境

- 既存保育園で保育士の創意工夫により、こどもの多種多様な居場所がつくられていた良さを引き継ぎ、更に柔軟かつ容易に変化が可能な仕組みをつくる。
- 組み合わせ自由なオリジナルの木製収納家具で、一人ひとりの活動や気持ちに寄り添う多彩な場づくりが可能。
- 天井から布やモビール等をこどもに合う高さで設けるよう簡易にかけられるフックを天井面に取付。
- 保育室や遊戯ホールの木製の柱や梁の位置で、穏やかに空間を分け、布等で区切ることも可能。将来の壁や建具の設置も容易に。

● 既存園からの参照



こども自らが選び 主体性を育む工夫

- こどもの目線の高さに玩具や絵本、画材などが見える環境をつくる。実際に触れて自らで選び主体性、能動性を育む。
- 各保育室のDEN、絵本などのリトルスペース、小さなテラスや庭など、少人数で集まるスペースを用意。こもって落着いたり集中したり、人との距離を感じとる。



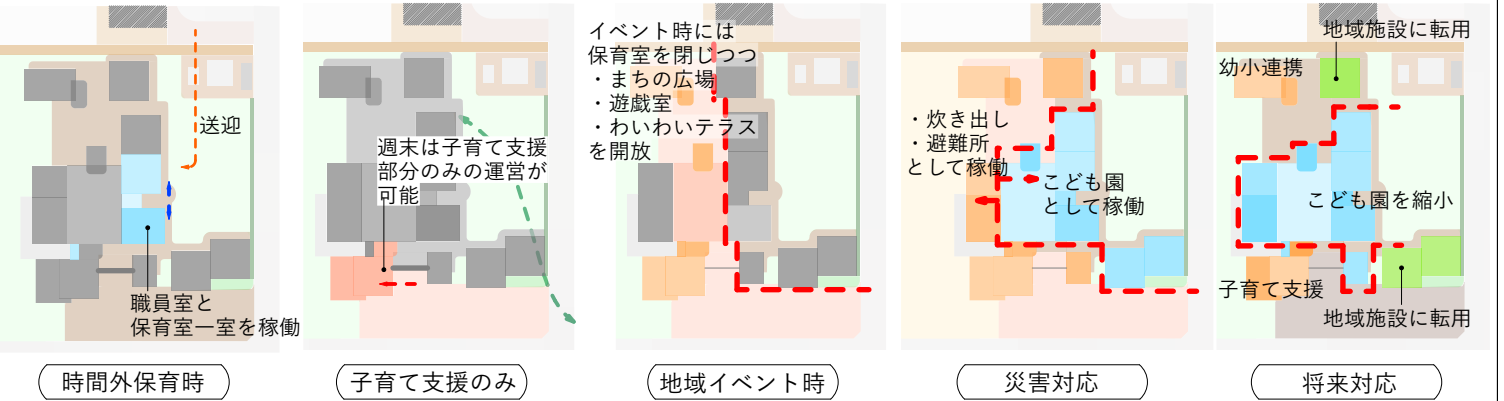
▲ 既存園では様々な物が身近に

フレキシブルな利用が可能な 分棟形式と多方向アプローチ

- 日々の時間帯による使い分け、地域イベントでの利用、また将来の少子化にも柔軟に対応できる分棟による構成。地震時には避難場所としての利用を想定。

- 南、北の2つの園への出入り口、校庭との繋がりなど多方向のアプローチがあり、セキュリティを確保しながら、利用に応じた出入りが可能。

- 分棟はプランニングの自由度が高くワークショップでの声を柔軟に反映。各室の大きさや配置などを、一緒に考え適宜決定できる。



みんなで「まちの未来」をつくる 【自由提案：地域全体の子育て、関係者の関わりや交流を生む 取り組み】

地域に開かれ みんなでこどもを育てる「まちの広場」

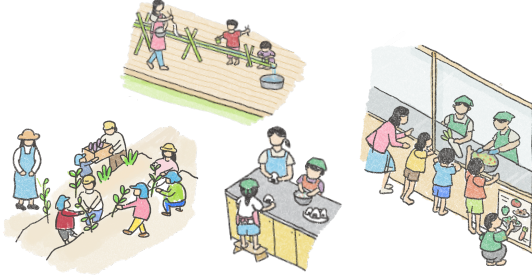


住宅街に面して開かれた まちの広場

- まちの宝である子どもたちを、地域全体で見守り育てることが大切と考え、住民同士やこどもとの関わりを持つ場として、住宅地が広がる南西側の敷地角を開き「まちの広場」を計画。

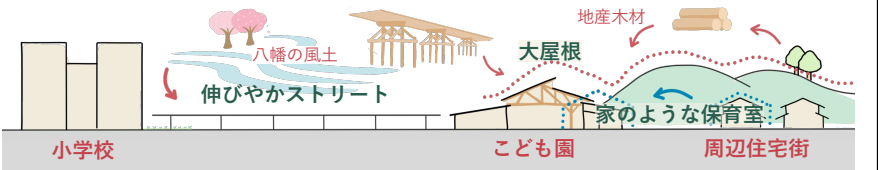
地域の食文化と「生きた食育」

- 小学校内の既存の菜園、ランチルーム横に新設する小さな菜園では、近隣農家に教えてもらいながら、園児・小学生と一緒に野菜や果物を育てて収穫。生育の過程を学び食べる大切さを感じる体験とともに、幼小連携を深める機会にも。
- 自分たちで育てた旬食材の調理風景が見えたり、小学生は家庭科授業で料理したり、外のテラスで食べたり、地域の竹での流しそうめんをしたり。農業／食／成長の関係性のなかに子どもたち自らが関わることで、地域の生業や食文化に根ざした「生きた食育」を実践。



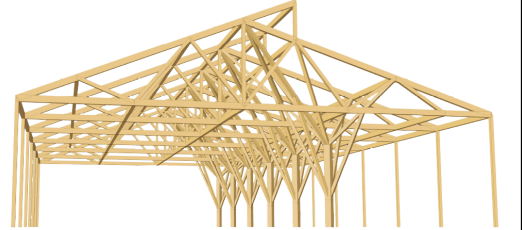
八幡の風土を継承する こども園

歴史と文化が重なり、3つの河川や広がる田畑など八幡の恵みある景観を表す大屋根と伸びやかなストリート。その場所にしかない光や風の存分な取込み。八幡の風土「風景・文化・光・風・土」を継承し、こどもと地域をおおらかに包み込み、こどもたちの原風景として記憶に残るこども園をつくる。



風景をつくる木架構

- エントランス、遊戯ホール、わいわいテラスには、木の架構による大屋根を架け園の中心軸として施設全体を緩やかに結ぶ。
- 大屋根空間は大スパンを実現するトラス構造とそれを受ける樹状の束ね柱で構成。柱は樹木のように枝分かれしてトラスを支え、木々が立ち並ぶ「森のトンネル」をつくり出す。大屋根は、構造体そのものが風景となる。
- トラスや方杖は、木材の規格寸法材や製材寸法4m以下とした合理的な構法。
- 耐火・準耐火構造にならない計画とし、京都府産材の中で比較的安価なKTS材を可能な限り利用。



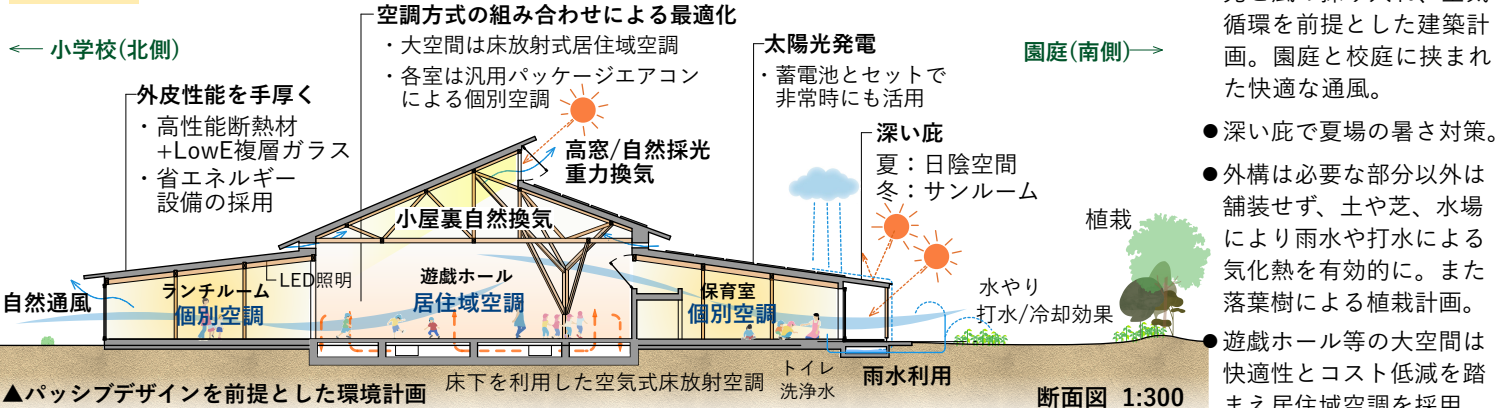
トラスと樹状柱による大空間 構造的合理性と詩的な空間性を兼ね備える



こどもたちの健やかな育ちを支える 環境計画 【コンセプト5：ZEB化等の環境配慮】

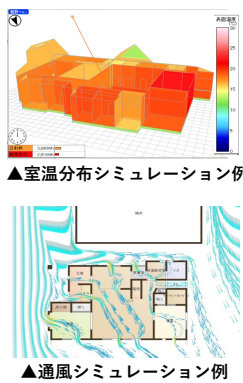
パッシブデザインによる エコロジカルな建築

環境負荷の少ない建物計画・設備計画の実現は当然のこととして、風土に根ざした光・風・水の自然要素へ適切な採り入れ、人や環境に優しい素材の採用、こどもの活動や体格に添った配慮など総合的に捉え、**こどもたちの健やかな育ちを支えるエコロジカルな建築**を計画します。



シミュレーションを通じた ZEB検討プロセス

- ZEBプランナーが外皮性能、高効率設備等を総合的に計画。温熱環境や空気の流れ照度など丁寧なシミュレーションにより検証。
- シミュレーション結果と概算コストを合わせて検証し、**ZEBの取得有無を含め最適解を見出す**。（基本設計終了まで）
- 機械設備の必要以上の充実よりも、こどもにとって望ましい環境を大切に考え、計画を進めていく。



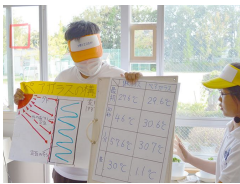
こどもが触れる床・壁は 木材や自然素材

- 乳幼児は身体が小さく、寝転んだり座ったり、**床に触れる機会が多い**ため、保育室の床材は、断熱性能も高く肌触りの良い厚みのある杉材を採用。また内装制限を踏まえ、こどもの触れる低い壁は木材や自然素材を採用。



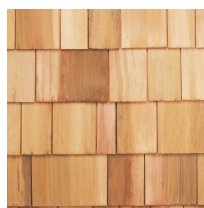
こどもの環境への関心・学びのきっかけに

- 打ち水で涼しく、窓を開ければ風が抜ける、木漏れ日を浴びる、木陰で遊ぶなど、日々の園での生活を通してこどもは心地よさを体感的に捉え、潜在的にエコへの学びを高める。
- 保育士や教職員は、朝一番の空気の入替えによる空調負荷の低減、園庭への水やり、気候が良い季節では窓の開放など、**管理運営面での細かな配慮により、快適でランニングコストを低減できる取り組みを実施**。開園前に運営面を踏まえたエコプログラムを実施。

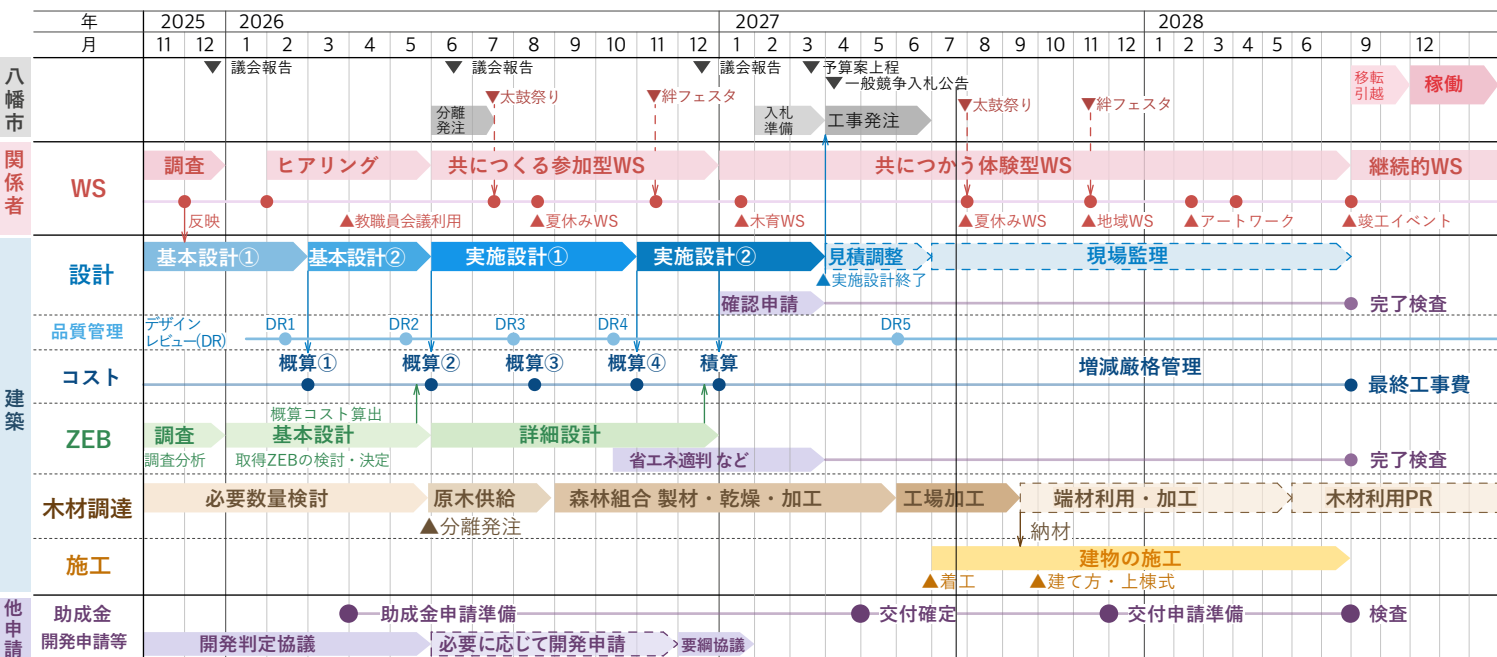


長寿命化を図る 木材の利用

- 外部の軒が深く雨がかりの少ない壁には、間伐材で**耐水性のあるヒノキ**を小サイズで貼り合わせる。細かな単位で部分的な取り替えが可能で、こどもによる部分的な色塗りで、愛らしい印象の園舎に。



事業を着実に進める 全体スケジュール



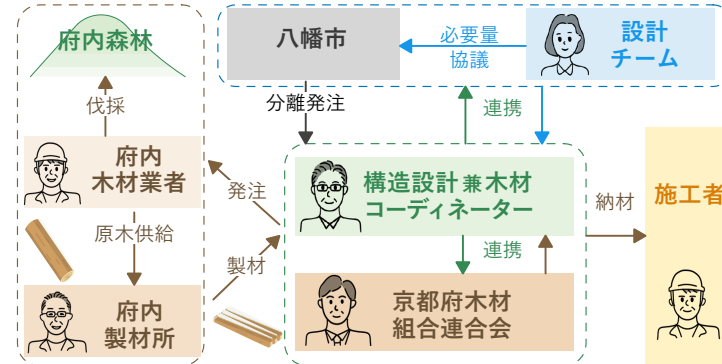
LCCを見据えたコスト縮減と 厳格なコストマネジメント 【コンセプト6：設計段階からのコストマネジメント】

京都府産木材による 経済的・合理的な木造建築

【イニシャルコストを抑える合理的・経済的な構法】

- 今計画では構造材、内外装に用いる木材は、可能な限り**京都府産木材**である「**ウッドマイレージC02認証木材**」を使用。
 - 耐火や準耐火構造とならない規模・階数と、1000㎡以下の防火区画を前提とした計画により、**木材を現しとし府産材でも比較的成本安の無等級材(KTS材)**を有効的に利用。
 - 規格寸法である**一般流通材**を用い、910mmモジュールで製材寸法4m以下による合理的な構法。メンテナンスも容易に。
 - 遊戯ホールなどの大空間の架構は、**規格寸法材を用いたトラスや方杖**で実現。
- 【調達・運搬・施工への取り組み】
- 構造設計者が**准木材コーディネーター**として関わり、京都府産木材を取り扱う京都府木材組合連合会を窓口、**必要な木材の量・質を押さえる**。府内で運搬ルートも短く。
 - 木材加工・製造に必要な時間を適切に見込み、市による先行分離発注等を検討し、府産材の**量・質を確保する確実性**と増額リスクをなくす。
 - 森林環境贈与税や府の木整備事業の**補助金**を活用。

■ 木材調達スキーム



確実に予算内に納めるためのコストモニタリング

【設計初期の適正な予算設定】

- 経験豊富な実績を活かし、過去の類似プロジェクトを参考に**適正なコスト比較と早期概算**を実施。
- 設計初期にコストへの影響が大きい項目の仕様を決定。メリハリのある配分で効果的にコストを低減。

【設計中の予算遵守】

- 設計段階毎に概算を行い、**初期設定コストと合致しているかを確認**し調整しながら進める。

【外部環境変化への対応】

- 物価上昇等に耐え得るよう、**予算の5%ほどの予備費**を設定。また物価指数等は常に把握。

【現段階での概算工事費】

- 上記に従い5%の予備費を見込み、社会・経済情勢の変化による資材や労務費の高騰に備える。
- 同類事例を参考とし、積み上げ方式による数量積算を実施し、**予算内であることを確認済み**。

■ コストモニタリング スケジュール

算出方法	基本設計①	基本設計②	実施設計①	実施設計②	発注	施工
決め事	配置計画 ゾーニング 必要諸室 地盤補強方法 LCCコスト	室の大きさ 動線 外観デザイン 構造・設備基本計画	詳細設計 構造・設備外構の統括 家具・サイン照明計画	詳細設計の統括 各種申請	工事費確定	
コスト確定度	60%	70%	80%	96%	100%	
概算手法	類似事例調査・比較 経済状況・物価動向分析	メーカー見積徴収・比較	積算システムデータ入力 VE提案	施工者見積調査分析	追加増減の厳格管理・交渉	
調整イメージ	建設予算 100%	100% 88% 115% 超過	90% 120% 超過	100% 105% 超過	93% 95% 入札効果 5%削減	100%
	目標予算	目標①	目標②	目標③	目標④	積算 最終工事費

■ 概算工事費

工事費構成	金額 (円)	構成比率
建築工事	10,900,000	1.1%
土工	8,500,000	0.8%
地業 (杭地業)	52,000,000	5.1%
躯体 (基礎・土間)	24,000,000	2.3%
木工 (構造)	180,000,000	17.6%
外部仕上	101,400,000	9.9%
内部仕上	156,000,000	15.2%
建具	78,000,000	7.6%
厨房機器	12,000,000	1.2%
電気設備工事	96,000,000	9.4%
機械設備工事	135,000,000	13.2%
外構工事	80,000,000	7.8%
解体工事	5,000,000	0.5%
諸経費 (共通仮設費・現場管理費・一般管理費)	86,000,000	8.4%
合計	1,024,800,000	100.0%
消費税相当額	10%	
予備費	5%	
総合計	1,183,644,000	